

# 『月刊食道楽』における外来語の機能 —明治末期と昭和初期に刊行されたグルメ雑誌を資料にして—

The Function of Loan Words in Japanese Gourmet Magazines  
: Based on the Magazines Published in the Late Meiji Period  
and the Early Showa Period

星野 祐子  
Yuko HOSHINO

## 要旨

近代日本における外来語の受容と定着過程をみてみると、明治期は、文明開化をきっかけに西洋語由来の外来語が、日本語の語彙体系に大量に組み込まれた時期としてみなすことができる。続く大正期は、外来語のカタカナ表記が徐々に定着し、表記の標準化が図られた時期として、そして、昭和初期は、大正期に大衆化した外来語が徐々に整理され、定着していく途上の時期として捉えることができる。

さて、外来語の流入は、新しい文化の流入と等しいわけだが、新しい文化として、庶民に最も身近であったものは、おそらく食文化ではないだろうか。そこで、本研究では、グルメ雑誌の先駆けである『月刊食道楽』を資料に、明治末期、昭和初期における外来語の使用実態とその機能を分析する。庶民生活の中で、「食」にまつわる外来語はどのように表現されたのだろうか。

明治期『食道楽』と昭和期『食道楽』をそれぞれ比較したところ、明治期『食道楽』は、欧米の食文化を伝えるために、言わば文脈上必須の語として外来語が用いられていたことが明らかになった。そのため、読み手への工夫として、ルビや付記の活用がみられた。ただし、日本語文における外来語の取り入れ方については、パターンがあるわけではなく、形式に原語の名残がみられることも多かった。和語と外来語の結合についても、現代から言えば違和感のあるものも多く、廃れていった結合パターンも散見された。また、外来語を使用することでの文体面での効果としては、スタイリッシュな響きの演出、カタカナ表記の使用による漢字・ひらがなの差別化などが挙げられる。そして、昭和期『食道楽』では、外来語の使用がより一層戦略的になった。外来語使用に、洗練された現代的な印象を求めるのは明治期と相違ないが、文脈の助けを受け、皮肉や滑稽さの伝達に外来語が効果的に使われるようになったのである。この点に明治期と異なる外来語の使いこなしを認めることができる。

## 1. はじめに

明治期の文明開化をきっかけに、西洋語由来の外来語が、日本語の語彙体系に大量に組み込まれることになった。先行研究<sup>1)</sup>の指摘にもみられるように、明治期は外来語の流入期として位置づけることができるだろう。続く、大正期は、外来語のカタカナ表記が徐々に定着し、表記の標準化が図られた時期である。外来語辞典の発刊が相次ぎ、それに伴い外来語研究も盛んに行われるようになった<sup>2)</sup>。そして、昭和初期は、大正期に大衆化した外来語が徐々に整理され、定着していく途上の時期として捉えることができる。

外来語の流入は、新しい文化の流入と等しいわけだが、新しい文化として、庶民に最も身近であったものは、おそらく食文化ではないだろうか。そこで、本研究では、グルメ雑誌の先駆けである『月刊食道楽』（以下『食道楽』とする）を資料に、明治末期、昭和初期における外来語の使用実態とその機能を分析する。庶民生活の中で、「食」にまつわる外来語はどのように表現され、どのように当時の人々に受容されていったのだろうか。

## 2. 先行研究

本研究で取り上げる『食道楽』には、当時の食文化を反映した様々な外来語が登場する。

外来語の研究には、表記のバリエーションに関する研究、受容の推移を数量的調査により明らかにする研究、外来語と原語間における意味・用法の異同を論じる研究などがあるが、ここでは、語彙的研究を中心に概観する。

榎垣（1963）は、明治期から大正期の外来語について「明治期には気取った感じを与えた外来語も、大正期には普通の日常語として受け取られるようになった」（p.84）と述べる。さらに、大正期は「外国文化の影響がかなりしみ込んで、新思想・新文学の形で具体化され、専門用語が大量に取り入れられ、演劇・映画・スポーツなどによって外来語が大衆化された」（p.86）時期であると指摘する。大正期における外来語の大衆化については、米川（1985：14）にも言及があり、大正期は、外来語を用いた慣用的表現（洋語慣用語）や外来語の略語が出現し、外来語の使いこなしがみられる時期とする<sup>3)</sup>。

また、外来語の量的推移に注目した橋本（2010：76）は、大正末期から昭和初期にかけての一時期を「大正時代に始まった外来語の増加が軌道に乗り、流行・氾濫するにいたった時期」とする。以上のことから、大正末期から昭和初期に使用された外来語は、日常語として定着する語もある一方で、実験的に使用された外来語も多数存在したことが推察される<sup>4)</sup>。

続いて、食に関する外来語の記述を取り上げたい。

飛田（1981）では、「大衆社会の受け入れ方——食べ物の外来語」と題した論考において、スープ、ライスカレー、アイスクリームが、どのようにして日本人の食生活に定着してきたかを論じる。石綿（2001）では、今回注目する明治末期から昭和初期にかけての外来語が、当時の社会や世相と関連づけて概説される。食べ物に関する外来語としては、明治期のものとして、サイダー、シトロン、ミルクセーキ、ピフテキ、ロース、フライ、ライスカレー、マカロニ、チョコレート、ビスケットなどが、昭和初期の外来語としては、メニュー、オードブル、トースト、ハヤシライス、カレーライスなどが挙げられている。前田（2000、2010）は、「お菓子」という語に注目し、その論考の一部において、外来語「ケーキ」と「菓子」の関わりについて論じた。

このように、外来語研究に関しては、語彙的関心からの研究は比較的豊富であるものの、「食」分野について言えば、いずれも概観的な研究に留まる。また、今回注目する「食」の専門誌を対象にした研究は、管見のところ見当たらない。さらに、文脈との関わりで、外来語の受容と定着を論じる研究も多くない。そこで、以下では、「食」の専門誌における外来語使用について、語彙的な面と文体的な面の二側面から考える。

### 3. 雑誌『食道楽』について

本研究では、日本におけるグルメ雑誌の先駆けである『食道楽』を資料として扱う。今回使用した『食道楽』は、復刻版として五月書房より刊行された。第Ⅰ期、第Ⅱ期の区分は、間に休刊を経たことによる。

#### 【第Ⅰ期『食道楽』（くいどうらく）】

明治38年5月～同40年8月、全31冊

主な執筆者：村井弦齋（作家）、赤堀峰吉（料理研究家）、福原雨六（俳人）など

#### 【第Ⅱ期『食道楽』（しょくどうらく）】

昭和3年創刊号～同5年12月号、全32冊

主な執筆者：松崎天民（新聞記者）、平山蘆江（新聞記者、作家）、林春隆（料理研究家）など

第Ⅰ期『食道楽』が創刊されたのは、日本が資本主義の興隆期を迎え、日露戦争渦中であった明治38年である。ちなみに、明治36年には、小説家村井弦齋が報知新聞に連載した小説『食道楽』が圧倒的な人気を博しており、その時流に乗って第Ⅰ期『食道楽』は創刊されたと考えられる。この第Ⅰ期『食道楽』には、日本料理や西洋料理の献立、調理方法などの実用的な記事から、各地の郷土料理の解説、食物と栄養、食と健康といった専門的な記事まで幅広く掲載されている。

続く第Ⅱ期は、大正デモクラシーの時代を経て、なおかつ第二次世界大戦にもまだ遠い、まさしく庶民文化の成熟期の中で創刊された。第Ⅱ期『食道楽』は、松崎天民を編集者とし、天民の幅広い人脈を活かした様々な執筆者が登場する。徳富蘇峰、倉田百三、長谷川伸などの文化人や、岡田嘉子、歌舞伎俳優六代目尾上菊五郎といった芸能関係者、当時の有名料理店の主人など、その執筆者の顔ぶれはまさに多彩である。また、第Ⅰ期の内容に加え、テーマ特集やそのテーマに合わせた座談会の設定など、読者の興味・関心を促すような、エンターテインメント性を備えた内容となっている。さらに、当時、首都圏を中心に増えてきた「カフェー」や「バー」などの新しい文化についての紹介も加わり、庶民文化の成熟期において「食を楽しむ雑誌」として受容されていたことがうかがえる。なお、読者層は、いずれの期も、食に対する関心が高く、生活に余裕がある中流階層以上の読者を想定することができる。さらに、詳しい調理法が掲載されていることから料理人も読者の対象となっていたといえるだろう。

以上、第Ⅰ期と第Ⅱ期の『食道楽』の傾向を紹介した。概して述べると、第Ⅰ期は実用的であり、食文化に対する啓蒙書として、第Ⅱ期は、「食」を機軸とした大衆的な読み物として評価することができる。

## 4. 調査方法

第Ⅰ期にあたる明治期『食道楽』の全31冊、第Ⅱ期にあたる昭和期『食道楽』の全32冊を対象に、食に関わる外来語を抽出、周辺文脈を含めリスト化し、分析の資料とした。

なお、明治期・昭和期ともに、表記に揺れがみられる語も多数あるが、本研究では表記の異なりは分析対象とはしない。漢字の旧字体については新字体に直して引用する。

また、明治期『食道楽』は総ルビであるが、例文の引用にあたり、ルビの効果を論じる時のみルビを記載する。

## 5. 分析観点

明治期『食道楽』と昭和期『食道楽』は書名の読み方も異なるように、編集方針や執筆者の顔ぶれは大いに異なっている。ただ、「食」にまつわる様々な情報が掲載された点は相違ない。当然、食に関する外来語の使用も多くみられ、そこで用いられる外来語は、最新の食文化を反映する。では、外来語が用いられる環境や外来語が用いられることの効果にはどのようなものがあるのだろうか。研究課題としては、これまで積み上げられてきた明治期、昭和期を対象にした外来語研究の成果をふまえ、以下の2点を設定する。

### 研究課題1

外来語の流入が著しい時期であった明治末期において、『食道楽』における食にまつわる外来語使用にはどのようなものがあったか。語彙的特徴と文体的特徴にはどのようなものがあるか。

### 研究課題2

外来語の使いこなしがみられる昭和初期において、『食道楽』における食にまつわる外来語使用にはどのようなものがあったか。文脈の中で外来語を観察することで、当時の使用について何か特徴を指摘することができるか。

## 6. 明治期における食にまつわる外来語

先行研究によると、明治期は、外国文化の流入に伴い、外来語を積極的に取り入れた時期にあたる。この時期の外来語の特徴としては、表記のバリエーションが多彩であり、原語に忠実な形で取り入れが進んでいった点を指摘することができる。大量の外来語が流入する過程で、とりあえず日本語文に取り入れてみる、という姿勢をうかがうことができ、様々な外来語を比較的柔軟に受け入れたのが明治期といえるだろう。

さて、明治期『食道楽』においても、同様の傾向がみられた。以下では、外来語使用に関して、語彙的な特徴と文脈的な特徴に分けて考察してみたい。

### 6. 1. 語彙的特徴

明治期『食道楽』における外来語使用を、語彙的な関心から考察するにあたって、いくつかの観点を設定した。まずは、外来語を含む文の理解を促進させる工夫として、フリガナの活用と本文中への付記について述べる。フリガナの活用については(1)で、本文中への付記については(2)で示す。

続いて、同時期の特徴でもあるといえるだろう、外来語の扱いに不慣れであるという点を(3)で取り上げる。米川(1997:21)は、明治期を「ひたすら吸収するだけの時代であった」と評する。本稿で取り上げる明治期『食道楽』は明治末期に出版されたものだが、「吸収するだけ」の使い方はみられるのだろうか。現代の外来語使用から違和感を持つ外来語使用を中心に分析していく。

最後に、(4)で、外来語が指し示す意味内容が、本文中に登場することなく、単に“西洋風”の演出として用いられている文を確認する。

### (1) フリガナを活用する

明治期『食道楽』は総ルビで書かれていることもあり、外来語を文中に取り入れる際、ルビの機能を活用しているパターンが多くみられた。なお、外来語の表記について考察をした石綿(1989:323)は、明治期を「漢字表記かなルビという一種の折衷、合成表記法が目立っている」時期だと指摘する。また、田島(2008:12)は「明治時代においては、漢字仮名交じり文のシステムにのっとって、また振り仮名を活用することによって、外来語の意味的な表記が多用された」と述べる。以上のことから、明治期は、外来語を漢字で本文書きし、意味的な指定においてルビを振る、という形式が一般的であったことがうかがえる。以下の例では、①～⑤が相当する。

- ① <sup>パン</sup> 麵包の食し方 <sup>パン</sup> 麵包は手にて裂き (第2巻第8号 明治39年 p.24)
- ② <sup>ポテト</sup> 馬鈴薯サラダ ▲ <sup>ちゅうくらみ</sup> 中位の <sup>じゃがいも</sup> 馬鈴薯 <sup>こ</sup> 十二個を <sup>かわ</sup> 皮の <sup>ま</sup> 儘に <sup>ゆ</sup> 茹で (第2巻第10号 明治39年 p.10)
- ③ <sup>うへ</sup> 上の <sup>しやしん</sup> 写真は <sup>ヴァレンタイン</sup> ヲ菓子 <sup>ケーク</sup> を撮せしものなり (第2巻第2号 明治39年 p.5)
- ④ <sup>このヘヤ</sup> 此野兎菓子 <sup>まこと</sup> は誠に <sup>こども</sup> 小児の <sup>よろこ</sup> 喜びさうに出来てゐませう (第2巻第3号 明治39年 p.6)
- ⑤ <sup>クッキー</sup> チョコレート煎餅 <sup>ちやうほうけい</sup> を長方形に切て (第2巻第3号 明治39年 p.6)
- ⑥ <sup>おおさじ</sup> クリーム大匙四杯及 <sup>はいおよ</sup> び右の <sup>ね</sup> オニオン <sup>しほ</sup> を入れ、塩、こせうを加へ、<sup>うへ</sup> かたまる <sup>お</sup> かげん <sup>お</sup> まで火の上に置く、<sup>米</sup> マッシュポテト、<sup>飯</sup> ライス <sup>そ</sup> を添へて出すべし (第3巻第8号 明治40年 p.17)

①と②については、本文中の漢字表記とルビが指し示す内容が合致しているものである。ただし、②の場合は、「ポテトサラダ」と複合語になる「馬鈴薯」に「ポテト」を、料理の説明に「じゃがいも」を、ルビとして与えており、一つの記事内に使い分けがみられる。

続いて、③と④で取り上げる「菓子」と「ケーキ」について考えてみたい。前田(2010:156)に「明治以降、西洋から来た菓子は長く“西洋菓子”と呼ばれたが、“日本菓子”の例は見なかった。“菓子”と言えば“和菓子”を中心とする意識があったのであろう」との記述がある。つまり、明治期における「菓子」は、積極的に西洋の意味を含むものではなかったとされる。そこで、ここでは、西洋由来であることを指定すべく「ケーキ」とルビが振られ、「ヴァレンタイン」または「野兎」との共起から、いわゆる洋菓子であることが理解される。⑤は「クッキー」に相当する日本古来の食べ物として、その類似性から「煎餅」が選択されている例である。⑥は外来語が本文でルビが一般的に使用されている日本語というのが珍しい。西洋料理のレシピであることを印象付けるためであろうか、外来語が本文書きされたのだと考えられる。

続いて取り上げるのは、同記事内の同語句に対して、2種類のルビが振られている例である。以下は、レシピに相当する記事の記述である。

## ⑦ コーン、ビーフの拵へ方

(原料) 塩漬牛肉一斤、甘藍一箇、胡蘿蔔七箇、馬鈴薯七箇、水一升二合余

コーン、ビーフを、湯鍋（八十度摂氏）に入れ、甘藍の根の所を切て（第3巻第2号 明治40年 p.18）

⑦では、当時、一般的に用いられた名称である「甘藍」に、和語の「たまな」、英語である「きやべーじ」がルビとして用いられている。「たまな」と「きやべーじ」が用いられた位置をみていくと、「原料」一覧には「たまな」、本文中には「きやべーじ」が用いられ、3種類の語種で指示内容を認識するような工夫がされている。

明治期の『食道楽』は、食文化や外来の食べ物について、周知を促す啓蒙的な雑誌として捉えられることにより、文脈の中で外来語を理解する仕組みが構築されたのだろう。

## (2) 付記を活用する

ルビの活用と近いが、小書きではなく本文中に付記を行うパターンについて取り上げる。付記の内容としては、文レベルによるものもあるが、文レベルの特徴については、周辺文脈との関わりを考慮した上で分析するため、ここでは語レベルの付記に限って紹介する。

- ⑧ 之にコーンスターチ（玉蜀黍の澱粉）一茶匙及び能く攪拌したる卵一個を加ふ（第2巻第2号 明治39年 p.23）
- ⑨ ホワイトワイン、シヤンペンは夏冬とも冷やして、出シクラレット（赤葡萄酒）は冬は暖い湯につけて暖むるか、火を加へて暖むるかして出すがよろしい（第2巻第9号 明治39年 p.20）
- ⑩ キヤンデイ（乾菓子）の製造所としては、此の家だけと云つても然るべきでありますから（第2巻第14号 明治39年 p.51）
- ⑪ ▲西洋無花果フイグ は先月中旬から出た、是は粒の大小に従ひ、三錢乃至八錢位、極小粒の品は五厘か一錢のもある。▲西洋梨ペーア 是も川崎附近の産で、大小により三錢より八錢位（第2巻第9号 明治39年 p.7）
- ⑫ 生菓子（ケーキ）の方は、長く置けないし、それに需要がないから製造しません（第2巻第14号 明治39年 p.51）

⑧～⑩は、外来語に（ ）書きで漢字を用いた説明がなされている。外来語の意味を理解するにあたって、表意文字である漢字の使用は、視覚的にも効果的であるといえるだろう。続く、⑪は（ ）書きではないものの、日本的な言い方に外来語が続いていることを、当該記事における列挙のパターンを想定することで、理解することができる。

⑫については、（ ）書きの付記がある点は、⑧～⑩と同様であるものの、外来語が（ ）書きされている点で異なる。ここで、「生菓子」と「ケーキ」それぞれが指す意味範囲を比較してみよう。現代日本語での使用はさておき、後続の表現「長く置けない」（＝保存）との関連性からいうと、この文脈では「生菓子」の方が、文意に適しているといえる。それにも関わらず、あえて（ ）書きで「ケーキ」と付したのは、⑪の記事が「森永商店の西洋菓子」という記事内の文章であり、記事内にも“西洋菓子”としての要素が求められたからだと推察できる。

### (3) 原語の文法の痕跡が残る

先に、ルビや付記の活用により外来語をスムーズに取り入れた例を紹介したが、ここでは、外来語の取り入れに苦心したであろう例を紹介する。以下に挙げる例は、すべて調理法を紹介する記事に用いられたタイトルである。注目するのは原語である英語の前置詞が残っている点である。

- ⑬ メンチピフ、ヲン、ポスターエッグス (第2巻第7号 明治39年 p.24)
- ⑭ ボイルド、フヒッシュ、イン、クリーム (第2巻第5号 明治39年 p.29)
- ⑮ ベーコン、アンド、エックス (第2巻第5号 明治39年 p.30)
- ⑯ ハンバクステーキ ウエズエツク (第3巻第2号 p.16)
- ⑰ オイスタ (牡蠣)エンド (及び) マコロニー (うどん) (第1巻第7号 明治38年 p.48)

⑰については、外来語に続く ( ) の中に、外来語を理解する手がかりになる語が付記されている。前置詞までも訳されているのは珍しい。

また、所有格の 's や複数形の s に相当する音が残っていたり、過去分詞 -ed が残った形で外来語として扱われたりと、外国語の音をそのままカタカナ表記したような語もいくつかみられた。以下がその例である。

- ⑱ アップルズ、パイ (第3巻第2号 明治40年 p.17)
- ⑲ ポスチドエッグズ (第2巻第7号 明治39年 p.25)
- ⑳ スチュードコッドティシユ (第2巻第2号 明治39年 p.22)
- ㉑ クリームド鱈 (第2巻第2号 明治39年 p.23)
- ㉒ ボイルド玉菜 (第2巻第7号 明治39年 p.25)

㉑は、現在ならば「鱈のクリーム煮」ということになろうが、『食道楽』では、「鱈」については和語をあて、-ed をそのまま活かした「クリームド」で「鱈」の調理方法を説明している。㉒の場合も同様に、過去分詞「ボイルド」が和語の「玉菜」(ルビは外来語だが) と共起している。

外来語の取り入れ方に一定のルールがある現代の感覚からすれば、㉑や㉒はどことなく違和感が残る。しかし、当時は、外来語を「ひたすら吸収するだけの時代であった」(米川1997: 21)。『食道楽』の外来語使用にも、日本語語彙体系への取り入れを模索していた姿を読み取ることができる。

### (4) 音の響きを活用する

前項で、新しい食文化を外来語で示すにあたって、明治期は日本語語彙体系への定着を模索している時期であることを述べた。また、『食道楽』が啓蒙的な雑誌だからこそ、用いられている外来語には、何らかの形で説明が付されている。ところが、以下の例においては、外来語が持つスタイリッシュな響きのみが注目され、本文中に当該表現につながる解説は見当たらない。料理名称「コッドフィッシュエラモード」についての記述が見当たらないのである。

- ㉓ コッドフィッシュエラモード

細かく裂き塩気を去りたる鱈肉をコーヒー碗一杯。能く搗きませたる馬鈴薯同じく二杯。クリー

ム又はミルク約三合。能く攪拌したる鶏卵二個バター半杯。塩及胡椒適宜。以上の品々を能く混合したる後土製の焼き皿（ベーキングヂッシュ）に盛りストーブに入れて焼くこと二十分時乃至二十五分時間の後其儘取り出し小き盆に載せてナプキンにて被ひて出す（第2巻第2号 明治39年 p.21）

以上が「コッドフィッシュエラモード」の作り方についての全記述だが、特に「エラモード」、すなわち「アラモード（仏：à la mode）」（現代風）につながる記述はない<sup>5)</sup>。それでも（たとえ「アラモード」を理解できなくても）、「コッドフィッシュエラモード」を料理名として受容できるのは、読み手が、その洗練された外来語の響きを演出として捉え、意味の限定に意識を向けないからなのではないだろうか。

現在においても、外来語の響きをなんとなくおしゃれであるとし、当該語の意味を十分理解せずに使っている場面に出会うことがあるが、日本語文における外来語の導入が積極的であった当時は、より一層そうした傾向にあったものと考えられる。

以上、明治期における外来語の使用について、語彙的な関心から分析を行った。ここまでの内容をまとめてみよう。

積極的な外来語の取り入れ方は、ルビや本文中の付記の使用につながり、外来語の理解の促進に寄与した。その一方で、原語の文法の名残や、今では違和感を抱く外来語と和語の結合がかなりみられ、日本語語彙体系への定着を模索している様子を読み取ることができる。また、外来語の正確な理解を促すことよりも、外来語が持つスタイリッシュな響きに、文体上の効果を求める使用もみられた。

## 6. 2. 文体的特徴

ここでは、外来語が用いられた文章をマクロの視点で捉え、外来語使用の実際とその効果について述べる。分析にあたっては、外来語の使用位置に着目した考察を行う。具体的には「タイトル」として使用された場合と「本文中」で取り上げられる場合の2パターンを確認する。

### （1）タイトルとしての使用

漢字、ひらがなよりも直線的で画数が少ないカタカナは、日本語文において、視覚的に有標となる。よって、外来語は、タイトルとしての使用に効果的で、実際に多くの記事で用いられている。カタカナ表記の外来語は、アイキャッチの役割を担っているともいえるだろう。

㊸ キューカンボーサラダ▲胡瓜六本の皮をむき、小口より薄くきざみ（第2巻第10号 明治39年 p.12）

㊹ カレフラワーの拵へ方

花椰菜、カウリーフラワー英、シウフラアール仏、フリウメンコール独、（季節一月より三月）  
（第3巻第1号 明治40年 p.19）

㊸はわかりやすさでいえば「胡瓜のサラダ」なのであろうが、「キューカンボー」は響きが新鮮である分、目に留まり、なおかつ、気取った料理であるかのような印象を与える。たとえ「キューカンボー」が理解語彙ではなくても、メインとなる食材は、概ね第一文の冒頭に位置していることから、ここでは、「キューカンボー」の語釈はなされていない。読み手は、レシピ中に登場する「胡瓜」を手が



かりに「キューカンボー」の意味を理解することになる。

㉕はタイトルに用いた新しい食材に関して、冒頭行で日本語、英語、フランス語、ドイツ語で語釈がなされている。『食道楽』が、「食」の雑誌として啓蒙的な雑誌であることをうかがわせる使用例である。

## (2) 本文中での使用

先に取り上げた例では、記事構成についての読み手の認識が、外来語の理解を間接的に促していた。その構成とは、タイトルで使用された外来語が、当該記事の第一文で解説されるというものである。

ここでは、読者にとって理解が十分でないだろう外来語が、文中に取り入れられたとき、読者の理解を促進するためにどのような配慮がなされているかを確認する。

- ㉖ ベーキング、パウダー即ち焼粉は、其粗悪なる品によると、十分の三以上は石の粉である（第2巻第7号 明治39年 p.34）
- ㉗ コキーとは、ゴールドケーキ、即ち金色菓子の事に於て、ラシタースは、ライスターズのつゞまりたるよび名なり（第2巻第13号 明治39年 p.19）
- ㉘ カステイラと云ふは、御承知の如く葡萄牙の一都府の名称です（中略）英米のスポンジケーキと、我国のカステイラとは、克く似た菓子ですが、彼国のは舌触りが軽くして、味ひが極めて淡白です（第3巻第6号 明治40年 pp.28-29）

㉖と㉗は「即ち」という語がマーカーとなり、その後、前置する外来語の意味について、理解語彙を用いた説明が続いている。また、㉗については、当該語の発音について解説が書かれているのが特徴的である。㉘の場合は「と云ふ」という引用表現がマーカーとなり、語釈が続く。㉘の後半の記述「スポンジケーキ」については、読み手が既に理解していると思われる「カステイラ」を比較対象にし、その食感や味わいを伝える。何かに喩え、当該語の理解を促す手法は、その他にも多くみられ、普遍的な方法であるといえる。先に「煎餅」に「クツキー」とルビを与えた例を紹介したが(⑤)、その発想と同根のものと言ってよいだろう。

以上が文脈の中で外来語を捉えた考察である。まず、外来語は視覚的に目立つこともあり、アイキャッチの役割を果たすことがわかった。そこで、タイトル位置に外来語を置き、当該記事についての興味・関心を高めた後、第一文で外来語の解釈を行う、というのが定型パターンとなっていた。文中で外来語が用いられた場合は、「即ち」や「と云ふ」という表現に導かれ、語釈がなされていた。また、読み手の理解を促進させる策としては、既に理解していると思われるものに喩える方法がみられた。

## 7. 昭和期における食にまつわる外来語

昭和期は日本語の語彙体系において外来語の定着が促進された時期であり、外来語使用やその解釈に、人々が徐々に慣れてきた時期でもある。外来語の表記も徐々に統一されてきている。昭和期『食道楽』に限っては、部分的なルビ使用になり、ルビを活用した記事が少なくなってきた。

さて、昭和期『食道楽』も、明治期『食道楽』のように、食文化の紹介や食材や食品についての取り扱いなどが多く掲載されている。そこでの外来語の扱い方は、明治期『食道楽』とそれほどの違いはない。では、昭和期『食道楽』の特徴は何であろうか。それは、記事内容に読み物としてのエンターテイ

メント性が加わったところである。もちろん「食」に関わる外来語も効果的に使用されている。そこで、以下では、外来語の使いこなしという点に絞って、昭和初期における外来語の使用について取り上げたい。

### (1) 比喩としての外来語の使用

明治期『食道楽』において、外来語が導入される際は、その外来語の多くが、新しい概念を紹介する啓蒙的な役割を担っていた。ところが、昭和期に至ると、外来語使用に新しいパターンが加わることになる。「読み物」としてのエンターテインメント性を付与する使用である。まず、比喩として食に関わる外来語が使用された例をみてみよう。

- ⑳ 花鳥喜世子梅園龍子最上千枝子と云つたスターに<sup>シユークリーム</sup>秋波を投げること——五銭のアイスモナカに過ぎないが、皺くちやになる迄プログラムを眺めては、ヴラエティを待ち構へて居る。  
猥褻なナンセンスがあやしい独唱の中にサンドウイツチのハム見たいに喰み出して地下室のコー<sup>ただ</sup>ル<sup>かわうそ</sup>コーヒー券を只で貰つてほんやりと河瀬と大鯉を眺ては（昭和5年8月号 p.76）

まず、㉑で注目したいのは、「<sup>シユークリーム</sup>秋波を投げる」という表現である。㉑は芸妓のレビューについての記述であり、食文化に関わるものではないが、「秋波を投げる」ということ、すなわち「媚びた目つきを送ること」の表現に、「シユークリーム」が用いられた点が、当時、既に「シユークリーム」が一般的になり、甘い菓子として定着していたことをうかがわせる。同記事内の「サンドウイツチのハム見たいに」という比喩表現も、「サンドウイツチのハム」の形状が既に一般的になっているからこそ使用できる比喩である。

### (2) 皮肉としての外来語の使用

外来語の使用が滑稽さを生んだり、書き手の皮肉の伝達に関わっていたりする例を挙げる。滑稽さや皮肉の伝達に外来語が貢献しているということは、まさに外来語の使いこなしを意味する。

- ㉒ 茹玉子と云へば映画俳優のエミール・ヤニングスが映画「罪の街」（一九二八年度映画）中に、拳闘家上りの悪党に扮しますが、その朝食が愉快です。  
茹でた玉子は、コツへと音をたて、何と自分の固い額へぶつ、けて割るのです。こいつあ、素的な考へじやありませんか、五つ、六つ、七つ、彼はパクへと……一体いくつたべる心算なのでせう。  
この映画を見て居たのが、異本の剣劇俳優の武井龍三と云ふ人です。（御存じの方があられるかも知れません）すっかりエミール・ヤニングスの演技に感心してしまひ、なほそれ以上にこの、しゃれた卵の喰べ方に気をとられてしまひました。そこで丁度お腹は空いてゐたし、常設館を出るなり、とび込んだのが京都四條は菊水と云ふレストランなのです。「ボイルド・エツグス」彼は実にうれしかつたに相違ありません。新しい作法をためすために彼は待ちかまへた「茹で玉子」をいきなり額へ持つて行つてしまひました。女給たちはびつくりしましたが、武井君にして見ればこれ以上の得意さはありません。意気揚々として「コツへ」と音を立てる筈のが、あまり勢いが好すぎて、あつ、「グシヤリ」顔は半熟の黄身でべつとり。いやもう何ともお話にならない

汚さです（昭和4年2月号 p.24）

⑩で注目したいのは「ボイルド・エッグス」と「茹で玉子」の対比である。「ボイルド・エッグス」は、外国映画の「しやれた卵の喰べ方」に関わる表現であり、なんとも気取った印象を与える。また、本記事での主人公「武井龍三」の脳裏を描く中で『「ボイルド・エッグス」彼は実にうれしかつたに相違ありません」という一文があり、ここでの「ボイルドエッグス」は、単なる茹で玉子ではない、憧れの象徴として用いられていることがわかる。ところが、現実世界の「茹で玉子」は、映画の世界のように「しやれた」ものではない。武井は意気揚々として卵を額で割ってみたものの、その行動は「何ともお話にならない汚さ」で終わってしまう。

つまり、「ボイルド・エッグス」と「茹で玉子」は、同一の食べ物を洋風、和風と呼び分けているだけでなく、武井の滑稽さを描き、おかしみを増幅させる装置としても機能しているといえる。

続く、⑪と⑫は、周辺文脈と関連語彙のサポートを受け、書き手の皮肉を読み手に伝達している例である。

⑪ キューカンバー、エンド、ウオーダークレス、サラダ等と云ふ長がながしい、名前のサラダが特に美味しいと思つたら。玉川の河つぶちでも鎌倉の溝でも、恐らく全国の原野路傍に此れを求めろが良い（昭和5年3月号 p.20）

⑫ お次は「菜豆」此れが本当の隠元豆と云はれるものだ。モダン人なみに申さうなら「フレンチビーン」。いやにお高く止つて、御同伴の若夫人風に作つたアレを引き連れて、「此のフレンチビーンは風味が良い。促成もの、味は良いな」とか何んとか、恐らく年に一度であらう處のデナーらしい奴を、クリスマスの宵にでも見栄で食ふと云ふ手合の多い、近代である（昭和5年4月号 p.44）

⑪の場合は「長がながしい」という否定的な評価が、「キューカンバー、エンド、ウオーダークレス、サラダ」に与えられており、語彙的な側面からみても、あえて外来語を使用することが、否定的な印象を与えることに役立っていることがわかる。続く一文をみても「玉川の河つぶちでも鎌倉の溝でも」という表現があり、レストランでは、外来語で表記され気取った雰囲気を与える「サラダ」が、実は、そのあたりの「原野路傍」に生息しているものに過ぎないという皮肉を伝達している。

⑫について言えば、まず、「モダン人なみに」「いやにお高く止つて」という直接的な表現に、皮肉めいた書きぶりが感じられる。また、「クリスマスの宵」を引き合いに出し、読み手に「フレンチビーン」の使用場面を想像させることで、滑稽さを伝えるということもなされている。「フレンチビーン」という響きがここでは滑稽さの象徴として用いられているのである。

以上、ここで取り上げた2例も、先に取り上げた例と同様に、外来語が持つ華やかさ、スタイリッシュさをあえて逆手に取り、皮肉さや滑稽さを伝えている例として捉えられる。こうした使用は、「食」についての娯楽性を重視した昭和期『食道楽』の特徴でもあるといえるが、そもそもこうした表現が可能であるのは、明治期『食道楽』の時代と異なり、昭和期が外来語の使いこなしがより一層進んだ時期であるからだろう。

## 8. おわりに

本研究では、グルメ雑誌の先駆けである月刊『食道楽』を対象に、明治末期、昭和初期の「食」にまつわる外来語の使用について論じた。

明治末期と昭和初期の雑誌を比較したところ、編集方針の異なりもあるとはいえ、明治期『食道楽』は、欧米の食文化を伝えるために、言わば文脈上必須の語として外来語が用いられていた。そのため、読み手への工夫として、ルビや付記の活用がみられた。ただし、日本語文における外来語の取り入れ方については、パターンがあるわけではなく、形式に原語の名残がみられることも多かった。和語と外来語の結合についても、現代から言えば違和感のあるものも多く、廃れていった結合パターンも散見された。また、外来語を使用することで文体面での効果としては、スタイリッシュな響きの演出、カタカナ表記の使用による漢字・ひらがなの差別化などが挙げられる。

昭和期『食道楽』では、明治期『食道楽』の模索の時期を経て、外来語の使用がより一層戦略的になった。文脈の助けを受け、皮肉や滑稽さの伝達に外来語が効果的に使われるようになったのである。もちろん、食文化の情報発信に外来語が用いられる場合は、それらは食品名や料理名を表す外国由来の語に過ぎず、明治期『食道楽』と使い方の相違はない。ただし、小説やコラムなど「食」と離れた場面で用いられる場合は、「食」に関わる外来語が字義以上の意味を伝達し、読み物としての面白さを与えていることがわかった。

最後に今後の課題を述べる。今回は、語彙や文体に関する特徴を中心的に取り上げたため、数量的な調査や表記の異なりに注目した研究は行わなかった。しかしながら、明治期から昭和期に移行していく過程で、もし、同一語における表記の異なりが減っていけば、それは当該語の定着を表すことになるため、表記の関心からも使いこなしを指摘することができるだろう。また、「食」の雑誌以外、例えば、美容の雑誌や医療の雑誌など、外国文化の影響が色濃く現れていると考えられる雑誌にも注目し、専門誌における外来語の使用についてさらに研究を深めていきたい。

### 【注】

- 1) 早くは榎垣（1956：19）に「開国以後の外来語は、ちょうど堰を切った水のように流れ込んだ。その大部分は英語だったが、美術・料理・服飾などの面にはフランス語が、医学・哲学・音楽などの面にはドイツ語が取り入れられた」との指摘があり、松岡（1982：109）にも「明治の文明開化を境として、大量の英米語が外来語として日本に入ったこと、あわせてそれぞれの特徴的な分野にドイツ語・フランス語・イタリー語・ロシア語が入ってきたことは、すでに多くの人によって指摘されている」と、同様の指摘がみられる。また、米川（1985：3）にも「黒船来航によって鎖国をやめざるをえなくなった日本は、そのときから英米語を中心とする外来語を大量に受け入れるようになった」との言及がある。ただし、漢語を含めて外来語の流入を計量的に調査した場合、明治時代に増加した語彙には漢語が多く、大正以後に増加の主役となったのが漢語を除く外来語であったという（宮島1967）。
- 2) 米川（1985：12）には「教育の普及・拡大、大衆文化の成立、ヨーロッパ文化の流入などによって、外来語は飛躍的にふえた。その結果、多くの外来語の辞典や新語辞典が出版され、外来語の研究も始まった」との記述があり、大正期に発刊された辞典と研究書が列挙されている。
- 3) 米川（1985：14）は、洋語慣用句として、「スタートを切る」「トップを切る」「ピッチを上げる」などを挙げ、略語としては、アナ（アナーキストまたはアナーキズムの略）、エス（エスケープの略）、プロ

(プロレタリアまたはプログラムの略)などを挙げる。

- 4) 竹浪 (1981: 202) は、大正期の外来語使用について「英語出自の政治・経済関係外来語には、二語あるいは三語接続した長大なものとか、高い英語の素養が必要な難解な単語とか、術学的ともいべきものがある。あたかも、外国語をどこまで外来語として使用できるか、その可能性を試しているかのような観がある。こうした高度の外来語使用に比例して、重要な、後々も頻繁に使用される外来語も多く登場するが、その一方、その場限りで消えるうたかたのような外来語が氾濫したこともこの時代の特徴のようである」と述べる。
- 5) 当記事は、鱈の料理法を集めた特集ページに掲載されていたことから、「コッドフィシュ」が「鱈」を指すものとは想定可能である。また、「コッドフィシュ」の和語である「鱈」は、本文中に明記されている。

### 【資料】

『月刊食道楽』（複製版・第Ⅰ期・1巻～5巻）（1984）五月書房

『月刊食道楽』（複製版・第Ⅱ期・1巻～6巻）（1992）五月書房

### 【参考文献】

- 石綿敏雄 (1989) 「外来語の表記」佐藤喜代治編『漢字講座 第4巻 漢字と仮名』明治書院 pp.312-334
- 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 榎垣実 (1956) 「外来語の歴史と特質」『言語生活』58 筑摩書房 pp.16-26
- 榎垣実 (1963) 『日本外来語の研究』研究社
- 竹浪聰 (1981) 「新聞に現れた特色——政治と経済の外来語」飛田良文編『英米外来語の世界』南雲堂 pp.199-225
- 田島優 (2008) 『シリーズ〈現代日本語の世界〉3 現代漢字の世界』朝倉書店
- 橋本和佳 (2010) 『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房
- 飛田良文 (1981) 「大衆社会の受け入れ——食べ物の外来語」飛田良文編『英米外来語の世界』南雲堂 pp.19-59
- 前田富祺 (2000) 「“お菓子”の語誌」『日本語学』19 (7) 明治書院 pp.24-29
- 前田富祺 (2010) 「“お菓子”の日本語文化史」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』29 和泉書院 pp.147-157
- 松岡洸司 (1982) 「外来語の歴史」『講座日本語学4 語彙史』明治書院 pp.90-114
- 宮島達夫 (1967) 「現代語いの形成」『ことばの研究 第3集 (国立国語研究所論集3)』秀英出版 pp.1-50
- 米川明彦 (1985) 「近代における外来語の定着過程」『京都府立大学生生活文化センター年報』9 京都府立大学生生活文化センター pp.3-22
- 米川明彦 (1997) 「明治・大正の流行語」『國文學 解釈と教材の研究』42 (14) 學燈社 pp.21-31

